



「2023年2月トルコ南東部を震源とする地震に関する調査速報会」を開催しました (2023/2/10)

テーマ：地震、トルコ、シリア、緊急調査、総合知
場 所：オンライン

2023年2月6日、トルコ南東部で発生した大地震により、トルコおよびシリアにおいて犠牲となられた方々に深く哀悼の意を表するとともに、被災された方および関係の方々にお見舞いを申し上げます。

当研究所では、発生直後から同地震の分析を開始し、緊急調査ワーキンググループが災害科学の総合知（理学、工学、人文・社会科学、医学、実践）に基づき情報共有を行いました。また、2月10日（金）16:00-17:00、調査速報会を開催し、速報的分析結果の緊急情報発信を下記のとおり行いました（オンライン、英語同時通訳あり）。速報会に続き、報道関係者との質疑応答も行いました。当日はトルコ含む20か国以上から約770名が参加しました。

<プログラム および 登壇者>

1. 開会挨拶
今村 文彦 所長
 2. 地震発生メカニズムと背景
遠田 晋次 教授（陸域地震学・火山学研究分野）
 3. 地震動特性と建物被害について
大野 晋 准教授、榎田 竜太 准教授（地震工学研究分野）
 4. リモートセンシングによる広域被害把握
越村 俊一 教授（災害ジオインフォマティクス研究分野）
 5. 被災地における救命と健康問題について
佐々木 宏之 准教授（災害医療国際協力学分野）
 6. トルコの防災体制及び今後の支援の方向性
竹谷 公男 特任教授（客員）、独立行政法人国際協力機構（JICA）防災分野特別顧問
 7. 質疑応答
 8. 閉会挨拶
栗山 進一 教授（災害公衆衛生学分野）
- 司会：森口 周二 准教授（計算安全工学研究分野）

<同報告会で発信された知見（一部）>

- ・複雑な断層からなる長い活断層帯が一気に動き地震発生。今後約数年は周辺の地震活動に注意が必要。
- ・断層沿いで震度6強以上、一部で7を超える記録観測。長周期振幅が2016年熊本地震と同等あるいはそれ以上
- ・余震から住民を守るためにも、被災した構造物の残存耐震性能の評価が必要。
- ・リモートセンシングとAIによる建物被害把握を行い、イスラエヒエにおける建物被害分布の特徴について報告した。リモートセンシング技術による広域被害把握の迅速化の重要性について議論された。
- ・子どもや高齢者、妊婦の低体温症リスクへの注意喚起
- ・トルコが、住宅更新により耐震強化する社会システムになっていない指摘
- ・仙台防災枠組の重要性、東日本大震災の経験に基づく具体的な支援、日本への教訓
など

<速報会詳細および関連情報>

速報会動画 [日本語](#) [英語](#)
[災害特集ページ（研究者が実施した解析・調査結果を掲載、随時更新）](#)

文責：広報室
(次頁へつづく)



今村 文彦 所長



遠田 晋次 教授



大野 晋 准教授



榎田 竜太 准教授



越村 俊一 教授



佐々木 宏之 准教授



竹谷 公男 特任教授 (客員)



栗山 進一 教授



森口 周二 准教授